

報告書

ルシー・オーブラック高校
クロチルド・ブノワ

国際交流基金からの招待は、私の生徒と私自身にとって素晴らしいニュースでした。本校国際科の日本セクションはまだ開講していませんでしたが、「ジャポニスム 2018」開催年に日本文化への関心を深められることを大変嬉しく感じた次第です。そんなわけで、私たちは今回いただいた機会を存分に満喫しました。2018年の春、私は長らく待ち望んでいた初めての訪日旅行を経験しています。この最初の旅行を終えた時には日本を再訪したい、日本文化や日本語をもっと知りたいという気持ちだけが残りましたが、今回2度目となる訪日旅行でこの2つの目的を十分にかなえることができました。日本語を話せない単なる観光客としての最初の日本への家族旅行は感嘆と魅惑に満ちたものでしたが、あれもこれもただ外側から眺めるしかなく、人々と出会いその日常に入り込むことは難しかったのです。

そのため今回の旅行で何よりも強く記憶に残っているのは、日本人に迎えられそこに溶け込むという特別な機会を得て（彼らのほとんどがフランス語を話す親仏家でした）、日仏両国の文化と言葉を繋ぐことができたということです。添乗してくれた増本さんと望月さんに何でも質問できたおかげで、最初の訪日時に理解できなかった謎が解けました。例えばバス車内で話を聞きながら自分が今東京のどのあたりにいるのか見当をつけ、頭の中に街の地図のようなものを描くことができたりと、望月さんの説明はとても有益なものだったと思います。また広島原爆ドームから資料館まで歩いた時には彼女の貴重な説明を通じて何が起きたのかを正確に理解し、今回の訪問から数多くの学びを得ることができました。案内役の方々には常に傍らで情報収集の手助けや日本語に関する説明をしていただき感謝しています。

同じく今回の旅行は、私にとって和食文化に関する知識を大いに深める機会となりました。訪問国の料理を詳しく知りたくても、一人で不慣れた場所に飛び込むのはなかなか難しいものです。国際交流基金のご配慮のおかげで、新幹線の弁当から老舗懐石料理店での全7品のコースに至る日本料理の全体像を把握することができ、私たちは食事を存分に堪能することができました。



今回の旅行でもうひとつ強く印象に残ったことは、数々の文化的な施設に加え、それ自体観光地ではない場所を訪問できたということです。例えば NHK 訪問の際には、フランスでも取り沙汰されることの増えた「SNS 時代の情報」という問題について活発な意見が交わされました。そして教師として特に印象深かったのが学校訪問です。かつて日本の教育制度を学ぶため訪日研修に申し込もうと考えたことがありましたが、自国の教育活動を充実させるために外国の高校が採用している運営方式を知るとはいつも大変刺激になります。まず目を奪われたのは質の高いインフラの数々でした。例えばエコスクールには校内のプールや理科の実験室、図工室、そして子供たちが自由に利用できるきれいな図書館があります。校長先生によると、ここはどちらかというと下町の学区で片親世帯も多く、区役所が学校に多額の投資をしているとのこと。これこそ公的サービスのあるべき姿で私たちもその必要性を痛感していますが、残念ながらフランスでは低所得世帯の子供たちが通う学校施設の質が総じて悪く、そこに大きな格差があることを認めざるを得ません。6 歳から既に自分の教室を掃除し、この年齢で 1 人地下鉄に乗って通学する子供もいるなど、小学生の自立性の高さにも驚かされました。小学校から高校まで、生徒たちが当然のように教室を掃除しており、このような態度が、教室という共同生活の場に全生徒を関与させ、礼儀正しさを育むのでしょう。私が勤めるフランスの高校でもこのような体験をさせたいと強く思っています。さらに日本の高校にはクラブ活動という共有の場もあり、様々な文化やスポーツに触れることで社会的・個人的に成長する機会を生徒に提供していますが、これも何かに打ち込んで楽しい学校生活を送るためのとても良い方法だと思います。私も生徒たちに文化活動を提案したいと思っていますが（「ジャポニスム 2018」への参加がまさにそうでした）、フランスの過密な授業スケジュールに加えてさらに、となるとなかなか調整が困難です。総じて日本の教育には、例えば埼玉の高校で見た書道の授業のように、フランスでおろそかにし過ぎている実際的な知識・技術（工芸や手作業、美術など諸々）の入り込む余地が残されているようです。



日本では古くからの工芸技術が大切に受け継がれており、敬意が払われています。今回はたくさん買い物をしました。大量生産品を含め持ち帰ったものすべてに「made in Japan」の表示がありました。「何言ってるの（……）、最高のものはみんな日本製だよ」というあの有名な映画のセリフは、わが家の子供たちとの間でもお馴染みです。フランスでは農産食品部門を除くと自国の産業が十分保護されているとはいえ、また学校教育が手作業を伴う学びを軽視する社会の風潮と絶えずぶつかり合っていますが、あらゆる職業の意義を認めその担い手に敬意を抱き、また良質で独創的なモノを今なお生産できる社会に暮らすのは実に気持ちの良いことだと思います。例えば京都での染色体験は参加者みんなに好評で、とても心落ち着くひとときを過ごすことができ、手作りの楽しさに改めて気付かせてくれました。個人的には 10 年ほど前に自分で何かを作る楽しみに再び目覚め、以来裁縫や編み物、絵画などは私にとって大切なものになっていますし、生徒たちの生活の中にもこのような習慣がもっと根付けば良いと思っています。他国の教育システムに触れることは、すなわち教師としての自分を客観的に眺めることです。フランス語を教えておられる日本人の先生方や、言うまでもなく日仏両国の教育システムを熟知された橘木先生と意見交換できてとても良かったです。フランスの高校の特徴が恐らく批判的精神の形成にあること、また現代史の教育に力を入れてきたのだということにも気付かされました。この旅行を通じて学んだ両国の違いや、問題点も見えてきた現行の教育習慣に対する新たな視点を得たことで、帰国後は教師として新たな活力を得たように感じています。

私の授業ではエコロジーの問題について頻繁に議論しており、今回の旅行にあたりこの研究テーマを選んだことをとても嬉しく思います。このように特に注視すべき視点を持って旅行に参加するというのは、非常に面白い考えだと思いました。日本もその歴史の中で予測不能かつしばしば破壊的な自然と深く関わり合ってきましたが、ここから謙虚さや敬意、そしてごく普通の自然現象に対する注意力（フランスにはありません）が生まれるようです。今回の旅行中最も喜びを感じたことの 1 つに、満開の梅の花や椿を眺めたことが挙げられますが、これは今回の旅行を象徴するイメージとして強く心に残ることでしょう。NHK で教えていただいた国際企画（気候問題について若者に問う企画）については、私たちの高校の生徒たちにも周知することに決めました。エコスクールは、例えば雨水を集めてトイレに流すなど、エネルギー自給という点で私たちの高校のはるか先に行く示唆に富んだモデルで、ここにも地震のリスクによって芽生えた意識からさらに一歩先へと進んだ事例を見出すことができます。というのも環境に優しいこうしたエネルギー自給の学校は、災害時に効率的な避難所として機能することで一石二鳥の効果を上げるからです。ですが日本は表裏一体の国でもあります。例えば店で配布される大量のレジ袋（本当にもうすごい数）には驚かされました。フランスではレジ袋を配布する習慣がなくなり、多くの人が布製のバッグを持ち歩く努力をしています。日本人は誰でも再利用可能なバッグをいくつも持っているのに、どこでももらえる使い捨ての袋がこんなに溢れていることを疑問に感じました。私たちはレジ袋を捨てずにとっておいて、高校で「日本における 10 日間分のレジ袋」と題するインスタレーション作品を制作しました。交流した暁星高校や伊奈学園の生徒たちと再度連絡を取ってこうした習慣に関する議論を継続し、自分たちの国で既に始まっている取組みについて知識を深め合うことができたと思います。

今回の 2 度目の旅行で日本について多くのことを知り、堪能することができました。しかし、これでもう十分かという、そうではなく、逆に、ますます日本に関するあらゆる本を読み、あらゆるものを見て、また何度も再訪したいという気持ちが高まりました。昨年 9 月に始まった私の日本語の授業にとっても有益でしたし、私にとって重要な通過点でした。ある国や文化に対し興味が高まると人はその国の言葉を学びたいと思い、その言葉が好きになります。なぜならこの文化を伝えるのは言葉だから。日本語を（少しでも）話せなければ、日本語で考えることはできません。旅行前、私はカタカナ（特に語彙）を覚えるのにかなり苦労していました。しかし今ではすべてが感情豊かで現実的な意味を持ち、さらに先へと向かうエネルギーが漲るようになって感じています。同様に、私たちフランス人が日本に目を向けるきっかけとなる、日本のポップカルチャーの手軽で魅力的な側面から一歩踏み出せたようにも感じています。例えば私たちが参加した茶の湯はとても価値あるもので、シンプルでごく自然なそれぞれの所作の裏に、気付かずにあっさり通り過ぎてしまいそんな大切な意味が隠れていることを知りました。茶道の先生による所作は実際には極めて精神性の高いある種の舞踊のようなもので、四畳半の茶室の細部ひとつひ

とつ——焚かれた香、椿の生け花、さらに書に至るまで——が私たち来客を迎え入れるために考え抜かれたものだったのです。書に記された「梅花雪裏春」という文字は、翌日宮島の寺の境内でピンク色の梅の花を眺めている時に雪が降ることを予言していました。日本を去る時に胸が締め付けられるような気持ちにさせられたのは、こうしたおもてなしの感性に触れたからだと思います。日本で過ごした 2 月の日々、この国は本当に温かく私にその門戸を開いてくれました。そして私の胸の内にも、明治時代のような新たな息吹の到来を感じています。

クロチルド・ブノワ

